



01 はじめに

をびや許しを道あけとして、不思議なたすけを頂いた人々が増えゆくにつれて、親神様のご存在とそのご守護も広く知れ渡っていき、やがて、おやさまの教えをさらに詳しく聞こうと、お屋敷へ足繁く通う人も出てきました。

立教より25年後の文久、元治の頃（1861～1865年頃）には、のちにおやさまの手足となって道の上に務められる人が、次々にお屋敷に引き寄せられます。

この頃に入信した主な人をあげると、

西田伊三郎（櫟枝村）、村田幸右衛門（前裁村）、仲田佐右衛門、辻忠作（豊田村）、山中忠七（大豆越村）、飯降伊蔵（櫟本村）、山澤良治郎（新泉村）、上田平治（大西村）、榊井伊三郎（伊豆七条村）、前川喜三郎（法貴寺村）

などの人々です。

自身や家族の身上などをきっかけに、おやさまの許に足を運び、おやさまは、

「よう帰って来たな。待っていたで。」（『稿本教祖伝逸話篇』8「一寸身上に」）

「待っていた、待っていた。」（『稿本教祖伝逸話篇』10「えらい遠廻りをして」）

などと、優しく温かなお言葉をおかけくださいました。

「待っていた」という言葉は、通常、特定の人を思い描き、その人が実際に自分の許に来たときに出る言葉でありましょう。おやさまは、世界中の人間の母親でありますから、どんな人も可愛いわが子であり、その子供の帰りをいつも心待ちにしておられるのです。

身上・事情にお手引きを頂いて、わらをもすがる気持ちでお屋敷へ帰ってきた人々に、おやさまは優しく温かく接せられ、不思議なたすけをお見せくださるとともに、少しずつ親神様のご存在やそのご守護についてお聞かせになりました。おやさまの親心に触れた人々は、何とも言えない慕わしさを強く心に感じたのでした。そして、そのお話がだんだんと心に治まり、心が救われていったのです。

おやさまにたすけて頂いた人々は、当時、すでにかかなりの数の人がいたようです。

その中から、おやさまのお話を素直に真剣に心に聴き、たすけて頂いたご恩を忘れ

ず、ご恩返しの気持ちを強く心にもって、教えられるままに精一杯に通る人が、一人、また一人と増えていってこの道は広まっていったのです。そうして、今の私たちにつながっているのです。

02 離反する人(助造事件)

その一方で、たすけていただいても、そのときだけの感激で、恩を忘れる人もあります。それどころか、教えを自分勝手に解釈して、自分の都合のいいように利用しようとする人も出てきました。

当時、おやさまにたすけて頂いた人の中に、針ヶ別所村の今井助造という人がいました。

初めは救けられて熱心にお屋敷へ参拝に来ていましたが、やがて、ぷっつりと来なくなっただけでなく、あるうことか針ヶ別所こそが本地であり、庄屋敷は垂迹、つまり、針ヶ別所の神が庄屋敷に現れているに過ぎないと主張し出しました。

根本たる親神様の理を錯誤した、とんでもない非常に重大な誤りです。

これに対し、おやさまは、大変厳しい態度をお取りになります。

30日余りも断食をなされた後に、お伴の者を4名連れて自ら針ヶ別所へ赴き、直接、談判なされ、一週間ほどそこへ滞在されて、徹底してその間違いを糾されました。

このことは、私たちもよく心得ておく必要があります。

教えを自分勝手に理解して、根本をねじ曲げることは、何よりも強く戒められます。

もちろん、人間誰しも心に間違いことはあります。往々にして、自分の間違いは自身自身では気付きにくいものです。

教祖が飯降伊蔵さんにお話になられた中に、

「世界の人が皆、真っ直ぐやと思うている事でも、天の定規にあてたら、皆、狂いがありますのやで。」（『稿本教祖伝逸話篇』31「天の定規」）

とありますように、『おふでさき』や『みかぐらうた』、『おさしづ』といった原典はもとより、おやさまのひながたを定規として、そこに教えて下さることを素直に学び修めようとする努力を、それぞれの年齢なりに、常に心掛けることが大切なのです。